



教育の理想を追求した教育実践家

クルト・ハーン(3)

放送大学・教授 岩崎 久美子

二十世紀最も革新的な教育者と評されるクルト・ハーン(Kurt Hahn)の三回目は、ユナテッド・ワールドカレッジ(以下UWC)の旗艦校、アトランティック・カレッジ創設の話を取り上げる。

UWCは、ハーンの青少年教育への思いや理想が凝縮された十六歳から十九歳を対象とする二年制の国際的な寄宿学校である。

UWCの創設の契機

UWCが生まれるきっかけとなったのは、一九五五年、ハーンがNATO防衛大学の司令官イギリス空軍・ダーバル元帥(Marshall Sir Lawrence Darvall)とNATO(北大西洋条約機構)防衛大学の講演会で出会ったことによる。NATO防衛大学は、国際機能的機能を有し、軍事に関する教育・研究の拠点として第二次世界大戦後にパリに設立された(後にローマに移転)。ハーンは、NATO防衛大学を訪問し、第二次世界大戦で敵対関係にあったドイツ、フランス、アメリカ、イギリスなどの軍人たちが、反共産主義といった共通の大義の下、協力し忠誠心とともに学んでいる光景に感銘を受けたと言われ

る。一方、ダーバル元帥は、ハーンがNATO防衛大学の成功事例を国際学校という形で青少年教育においても再現したいとの考えに心を動かされた。ハーンとダーバルは、指導的役割を担いうる有為な若者を反共産主義の環境下で教育を行いたいとの思いで一致した。NATO防衛大学を頂点としそれにつながる各国の高校生レベルの生徒を集めた国際的教育システムの創設といった考えが、後のUWCの構想につながったといわれる。防衛の最前線にいるNATO関係者が教育に関心を持ったのは、東西冷戦という時代背景によるものであろう。

ハーンは、ダーバルとともに、このビジョンを現実のものにするため、賛同する産業界、銀行界、政治界、教育界の人々を集め、UWC創設のための推進委員会を結成する。

推進委員会の主な任務は、第一に用地を見つけること、第二に用地を購入し大学として発展させるための資金を見つけること、そして第三に校長を見つけることだった。

第一と第二のUWCの用地取得の任務については、当初の推進委員会のメンバーであったフランス生まれの実業家ベッセ(Antoine

一九六二年、UWCアトランティック・カレッジが創設された。当時、イギリスのタイムズ紙は、UWCの創設を「近年、最もエキサイティングな教育の試み」と評した。

国際バカロレアとUWC

UWCは、異なる国や背景を持つ若者たちが思春期という人生を形成する時期に共に生活し学びあうことでお互いを理解し、生涯を通じた友情や絆を形成することを目指す新しいタイプの学校であった。

UWCは独自の教育カリキュラムを検討していたが、その過程で、国際バカロレアプログラム(以下IB)ディプロマ・プログラム(以下DP)の開発に深く関わることになる。

UWCの中心は、ハーンのビジョンを具現化することに賛同したイギリスの人が中心であったが、IB事務局の設立は、ジュネーブ国際学校を拠点とする教師グループが中心であった。この二つの動きは全く異なるものであったが、いずれも、冷戦における東西の対立、第二次世界大戦後の南北問題、人類の相互依存といった課題を強く認識していた。また、ジュネーブ国際学校では、国ごとの大学進学準備のために異なるカリキュラムで学ぶ生徒たちが共に学ぶことができるような、国際的視野に立った共通のカリキュラムの開発・提供を求めている。UWC創設の五年後、IB事務局が一九六七年に設立される。

IBDPが開発されると、UWCとIBの異なる二つの流れが、同じ方向性を持って統合され、ジュネーブ国際学校などの国際学校を中心とする国際学校とUWCにより、IBDPが導入され実践されることになった。

現在、UWCは、多くの国々にカレッジを有するに至っているが、いずれのカレッジでもIBDPが導入されている。UWCは、IB教育をリードする存在であり、IB普及においても国際学校のモデルとなっている。

ハーンの信念

ハーンは、このように生涯にわたり、ドイツのザールームスクール、イギリスのゴードンストウン・スクール、そしてUWCと次々学校を創設した。学校を創設するたびに、ハーンは教育に対する考え方は常に進化していった。

ハーンは、平和への道筋としての教育の力を信じ、社会における他者への思いやりの希薄化を危惧、人を思いやることへ気持ちを変化させる必要性を頻繁に語っていたと言われる。IBのカリキュラムに反映されている地域貢献や奉仕の精神は、ハーンのこのような思いから来ている。

ハーンは、ヨーロッパやアメリカで退廃的文化が蔓延して行く中で、若者にそのような文化が影響することを心配した。そのため、若者の態度や行動を教育によって変えることができるよう導くことが重要と考えた。彼が最も変えたかったのは、戦争の原因となった国家や人種に対する偏見、そして自分で何かをするよりも単なる傍観者となりかねない若者の意識そのものであった。このようなハーンの信念は、まさにハーン自身が戦争の災禍を受けた経験から導かれ、その中で人としてあるべき姿、生き方を突き詰めて考えた結果かもしれない。

若者の態度を教育的に改善する方法として、ハーンは、さまざまな国や文化を持つ若

Besse)という個人的後援者の寄付で可能になった。ベッセは、オックスフォード大学に多大な寄付をするなど慈善事業家として名を馳せていた。ベッセから寄付により、カーディフから西に一四マイル、ヒースロー空港から至近距離、ウェールズ沿岸にある十二世紀の城(セント・ドーナツ)の購入が可能になった。ハーンは、ワーズワースのように、魂の育成には自然の美しさが重要であり、生徒時代の思い出によって生涯影響を受け続けるのであれば、肉体的にも精神的にも健全な環境の中で過ごす必要があると考えていた。

第三の校長選出については、海軍で工兵提督をしてきたホーア少将(Rear Admiral Desmond Hoare)に白羽の矢が立った。ホーア少将は学校の校長や大学での教育の経験はなく、また、海軍少将が校長になることは、NATO関連の教育施設とのイメージを持たれる恐れもあった。しかし、ホーア少将は海軍での仕事のみならず、自主的活動として少年クラブの指導もしていた。彼は判断力と、生徒への接し方、生徒を理解する卓越した能力を持っていたといわれ、結果として、校長としての適格さと有能さを示したとされる。

者たちが、積極的に、困難な奉仕活動、特に人命救助に参加すること、記憶力と想像力を鍛える学問に参加すること、リーダーシップを発揮し、またそれを受け入れるチームワークに参加すること、そして一人ひとりが、チェロの演奏であれ、船の建造であれ、昆虫学であれ、ルネサンス建築であれ、自分の「大いなる情熱」を追求できる機会が大切と考えたのである。このような信念は、まさにIBのカリキュラムに色濃く反映されている。

ハーンはどのような人物だったか。ハーンに会った者によれば、ハーンは厳粛で慎重な趣で目を伏せて近づいてきて、話をするときには、腰をかがめ、手を組んで佇み、まるで聖職者のようであったという。人を論す話し方をし、議論好きで公正、その姿は穏やかな笑顔に満ちていたといわれる。

ハーンは、二度の大きな戦争とその後の冷戦時代という激動の時代に生きた人物である。ハーンは青少年の教育の可能性を追求した理想主義者であり、その理想を、学校教育を通じて実現しようとした。そのレガシーを振り返れば、UWCなどの創設した学校、IBカリキュラム、そしてアウトワード・バウンドに代表される野外教育活動など、いずれの試みも教育の世界でいまだに輝きを発している。

＜参考文献＞

A. D. C. Peterson, *Schools Across Frontiers: The Story of the International Baccalaureate and the United World College*, Open Court, 1987.
UWC History & Founding ideas (<https://www.uwc.org/history>) (二〇二三年六月一日検索)